

C. F. マイアー『護符』における「語る私」

馬 場 紀 臣

„Das erzählende Ich“ in C. F. Meyers Novelle „Das Amulett“

Toshiomi BABA

Abstract

Oft ist der Mangel an geistiger Weiterentwicklung in dem 58jährigen Shadau, dem Erzähler (dem erzählenden Ich) der Binnenerzählung, hingewiesen worden. Aber wir denken, Shadau ist seinem Alter entsprechend geistig gereift. Zwar mischt er sich mit den Kommentaren und Reflexionen nicht in seine Erlebnisse, doch zeigt sich seine Reife in dem objektiven Erzählverfahren, in der angemessenen Auswahl und der passenden Zuordnung des Erzählstoffes und in der genauen Charakterisierung und Handlungsbeschreibung der Personen. Seine wahre Selbstkritik läßt sich an seiner Erzählhaltung erkennen.

はじめに

コンラート・フェルディナント・マイアー (Conrad Ferdinand Meyer) の最初の散文小説である『護符』 („Das Amulett“) は1873年に出版された。ヴィルヘルム・オルブリッヒはこのノヴェレの内容を次のように叙述している¹⁾。

ハンス・シャダウは幼い頃すでに両親を亡くしていた。彼の父はドイツ人であったが、コリニ提督麾下、フランスとの戦いで戦死した。息子はおじに引き取られ、ビール湖畔のおじの地所で信仰心の厚いカルヴァン派として教育された。彼の願いは、尊敬する将軍に仕えて自分の信仰のためにスペインとアルバに対して戦うことを許されることである。それゆえ、ある日見知らぬ男が馬丁として雇って欲しいと申し出て来たのは、彼には実に好都合であった。この男から彼はフェンシングを習い、後にシュトゥットガルトからこのベーメン人に対する勾留状が到着したとき、彼を助けて逃亡させる。

1572年、19歳のシャダウは馬でパリへ向かう。メランで彼は、同じ宗派の議会顧問官シャティヨンと知り合う。この人は長年にわたる追放生活の後、宗教和議のお陰で再びパリの自宅へ帰ることが出来るのである。ガスパルドという名のすらりとした美しい令嬢が同行している。後に明らかになったところでは、コリニ提督の弟ダンドロの庶出の娘で、提督の姪である。宿の三人目の客はフリブルクの若いヴィルヘルム・ボカルトで、彼は同じようにパリで軍務に就きたいと思っている。ただしカトリックの側。この二人の若者はすぐ親しくなる。ボカルトは子供のとき、アインジーデルンの聖母マリアへ彼の母が代願することにより、麻痺を治して貰った。それ以来彼は絶えず聖母像の刻まれている銀のメダルを護符として胸に掛けている。

シャティヨンの推薦によりシャダウは、パリで提督の私設書記となる。ガスパルドへの愛は受け入れられる。しかし、ユグノー派の人々の状況ははっきりと目に見えるほど悪化する。若いが、体の弱い決断力のないシャ

1) Wilhelm OLBRICH: Der Romanführer. Bd. 2. Der Inhalt der deutschen Romane und Novellen von Anfängen bis zum Beginn des 20. Jahrhunderts. 2., neu bearbeitete und veränderte Auflage. Stuttgart: Anton Hiersemann 1960. S. 413.

ルル王は確かに一見コリニの味方のようにであるが、彼の母親カトリーヌ・ド・メディシスと弟アンジュー公はド・ギーズ家のカトリック派側についている。

シャダウとガスパルドも彼らの宗教のゆえに公道で侮辱にさらされる。シャダウがある夜、ルーブルにボカルトを訪ね、彼と共に帰宅の途上、ギーシュ伯爵とぶつかる。すると伯爵が彼をひどく乱暴に侮辱するので、決闘が避けられなくなる。決闘が始まる前にボカルトは友人の胴着の中へそっと自分の護符を押し込む。伯爵の必殺の剣の刃はそれに当たって曲げられる。それでシャダウは相手をうまく突き刺す。

パリの信仰騒擾は、今や高まって聖バルテルミーの夜(1572年8月24日)となる。コリニは闇討ちを受け負傷する。臨終の床で彼はガスパルドをシャダウと結婚させる。その間モンテーニュは老シャティヨンに逃げるよう説得するがうまく行かない。自分の宿所へ帰ったシャダウは、ボカルトから殆ど懇願されるようにして、約束していた彼の隊長をルーブルに訪問するよう説得される。ルーブルで彼は逮捕される。ボカルトの部屋に閉じこめられて、彼は王がその母や弟とバルコニーで話しているのを立ち聞きし、それによって、計画された残虐行為を知り、路上の銃声や叫び声、喧噪を聞き、火が燃えるのを見、恐ろしい夜の恐ろしい犯罪行為全体を予感する。最後に彼は自分の妻を救い出すようボカルトを説得するのに成功する。スイスの護衛兵に変装して、シャダウは彼とシャティヨンのもとへ急行してみると、この老人は殺害され、ガスパルドはギーシュ伯爵の友人であるリニェロルに脅されている。シャダウはリニェロルから見破られるが、それでもガスパルドを連れて逃げる事が出来る。脱出を助けたボカルトは凶弾に倒れる。市門のところで二人は呼び止められるが、歩哨の隊長が、シャダウが昔逃亡を助けたあのベーメン人である。彼はシャダウに馬と偽造のパスポートを提供してくれる。それで二人は妨げられることなくスイス国境へ到着する。おじはその間に亡くなっており、シャダウはビール湖畔の地所を引き継ぐ。

1

ベンテリ (Benteli) 社版の校訂版全集によると、この物語は前置きと10章から成っている。¹⁾ゲルハルト・P. クナップはこのノヴェレの外的構成と内的構成及び物語の日付を、コリニに対するテロ行為が史実として1572年8月22日に

なされたのを基礎として次のようにその関連を示している。なお、推定の日付は記号によって記されている。²⁾

第1章： 梓筋 1611年3月14日；シャダウは58歳である。

第2章： a) 前話。シャダウは1553年に生まれた；彼の父は「サン・カンタンの壘壁上で」(1557年☆) 戦死した；彼の母は「しばらくして」死んだ。シャダウは母方のおじによってショーモンで育てられた。軍務への準備：すでに14歳で少年は志願して武器を取った(1567年☆)。サン・ジェルマン・アン・レの講和の勅令(1570年)の後、コリニの麾下に服役するために、「多年のびのびになっている宣戦布告」を待ち望んでいる；

b) 第1の筋のシークエンス：「五月のある夕方」(以後の筋全体が置かれている1572年☆というのが後に推測されうる) フェンシング教師のエピソードが始まる；

c) 第2の筋のシークエンス：「さらに別の災難」：ビールの結婚式での殴り合い。b)は1572年☆5/6月と、c)は1572年☆6/7月と決められうる、と遡及的に推測されうる；シャダウは今や19歳である；

第3章： 第3の筋のシークエンスで本筋の開始：「あるタベメランの塔に近づいた」；それから三つ百合という宿屋でボカルト、ガスパルド、シャティヨンとの出会いによって決定的な糸が結ばれる。第3のシークエンスは1572年☆7月中頃と決められうる、と遡及的に推測されうる；

第4章： 第4の筋のシークエンス；「このめぐり会いののちに、二日目の夕方に」シャダウは—それゆえ7月半ば☆—パリに到着する。強

1) テキストとして Conrad Ferdinand MEYER: Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. Hrsg. v. Alfred Zäch. Bd.11. Bern: Benteli 1959. S.5-73. を使用する。なお、テキストの訳文、訳語は、古見日嘉訳『聖母像のメダル』(『ドイツ名作集』世界文学全集 第47巻 新潮社 昭和三十九年 507-573頁) を使用させていただく。ただし、適宜、多少変更させていただいた。引用文の末尾の括弧内の数字はそれぞれの頁を表す。

2) Gerhard P. KNAPP: Conrad Ferdinand Meyer. Das Amulett. Historische Novellistik auf der Schwelle zur Moderne. Paderborn·München·Wien·Zürich: Ferdinand Schöningh 1985. S.66ff. 推定の日付の記号は☆を用いた。

い奪取で彼の滞在の第1週(7月の第3週)が報告される。「8日目に」(7月21-23日頃☆)提督との出会いがなされる。第4シークエンスの残りはこの一日の出来事を包括する。初めてマイアーは何度も(例えばシャダウのシャティヨンとの会話において)時間拡張を使用する。

第5章: 第5の語りシークエンス:「翌朝」(ほぼ7月22日☆)提督に対するシャダウの関係が深まる。第5シークエンスの出会いと出来事がまたもや一日を包括する。

第6章: 第6の語りシークエンス:「翌朝」(ほぼ7月23日☆)ギーシュとの決闘が行われる。このシークエンスも一日の出来事を包括する。

第7章から第9章まで: その間一ヶ月が経過した。読者は今、1572年7月23日から8月23日までの時間であるに違いないと知らされる。[...] アンリ・ド・ナヴァルの母、ジャンヌ・ダルブレの殺害(1572年7月9日☆)とアンリのマルグリットとの結婚(1572年8月18日☆)に言及する奪取された中間報告は、読者にその間に起こったことについて知らせようとする。というのは、彼はまず最初に結婚を挙げ、それを「その直前に」なされたジャンヌ・ダルブレの毒殺でかすがいでとめて固定する。こうして報告は時間関係をはっきりさせるよりもむしろぼやけさせるのに役立つ。

第7の語りシークエンスは8月23日の朝に始まり、8月24日、聖バルテルミーの日の午後に終わる。(23日は1572年は土曜日に当たる。マイアーはこの陳述を彼の典拠から借用することが出来たであろうが、しかし、彼はそれを断念した。)第7のシークエンスは第7, 8, 9章にわたる。時間奪取と拡張は何度も使用される。第8章のはじめ頃ボカルトは間違っ確認する:「さて、今日は、バルテルミーの日だ」。この陳述は正しくない: 実際はまだ8月23日の晩である。この箇所マイアーは全体として入念に仕上げられたこのノヴェレの年代順に鑑みて驚くべきミスをしてしまった。

第10章: 第8のそして最後の語りシークエンスは「二週間後の、あるすがすがしい秋の朝に」行われる(ほぼ1572年9月7日)。このシークエンスは枠内物語の進行を終える。

前置きはいわゆる「編者の虚構」であるが、クナップのこの概観にも示されているように枠物語であり、続いて、前話、二つのエピソードといういわば予備段階が有り、それから本筋が開始する。クナップは第3章から本筋の開始とみなしているが、まだ本筋の助走の段階であり、第4章でパリへ到着してから本格的に展開する。そして第6章の決闘を終え、シャダウがガスパルドの愛を得るまでが第1段階、第7章から第9章を第2段階、第10章が終結の段階と大きく分けることが出来る。助走の段階の宿屋の場面の日が一日、第1段階は連続した3日間、第2段階は連続した2日間、終結の段階が1日である。

これを語り時間である頁数でみると、外枠2頁、予備段階9頁、助走段階9頁、第1段階31頁、第2段階20頁、終結段階2頁となる。予備段階や助走段階が意外に多いのは、二つの頂点へ達する前に歴史的に複雑な時代の状況を執拗に取り上げようとしたゆえであり、第2段階に比べて第1段階が多量であるのもやはり同じ理由からである。

2

われわれは、まず第1章の前に置かれた前置きに目を向けよう。スヤーク・オンデルデリンデンやクナップが指摘しているように、この作品の前置きと第1章とはそれぞれ枠になっており、二重枠をなしている¹⁾。

Alte vergilbte Blätter liegen vor mir mit Aufzeichnungen aus dem
Anfange des siebzehnten Jahrhunderts./ Ich übersetz sie in die Sprache
unserer Zeit.(6)

(十七世紀初頭の手記の含まれている、黄色に変わった古文書が、私の目の前にある。私は、それを、われわれの時代の言葉に直す。) (509)

この言葉は、もちろんフィクションであるが、この語り手は編者あるいは作者C. F. マイアーを装った語り手である。この言葉についてオンデルデリンデンは、「前置きの一人称の人物は虚構であり、それはもちろんまた、次に続く手

1) Vgl. Sjaak ONDERDELINDEN: Die Rahmenerzählungen Conrad Ferdinand Meyers. Universitaire Pers Leiden 1974. S.19.; Gerhard P. Knapp: Geschichte ohne Versöhnung. Conrad Ferdinand Meyer: „Das Amulett“ (1873). In: Winfried Freund (Hrsg): Deutsche Novellen. München: W. Fink 1993. S.155-164., S.158.

記にもあてはまる。前置きは、枠とすることが出来る。[...]読者にだけ向けられた、同時に、極めて退化した枠と言える。というのは、この現在の層は、どこでも再度取り上げられることはないからである。それにもかかわらず、この現在の層はともかく原稿の虚構 (Manuskriptfiktion) を創りあげ、時間陳述をしている。もっとも、この時間陳述はそれからすぐ第1章の第1行において一層明確に規定される。この未成熟な枠の主たる課題は、事実また、専ら次に始まる物語が現代語であることの弁解である。つまり、一人称の人物は、自分は伝えるべき手記を現代ドイツ語へ置き換える、と告げる。』²⁾と述べている。

クナップも、この「前置きとして述べられた注釈は、発端で、上位に置かれた最初の枠を提供する。ここで作者は、<文書で確認された>出来事を固有の時代に適った言葉で表現する語り手であることを間接的に表明する。虚構性と歴史的認証はすでにこの二つの文章である種の抗争に入る。』³⁾と言っている。

「十七世紀初頭の手記」という表現は、文字通り、手記を書いた現在の時間層、つまり、手記の物語の語り時間が十七世紀初頭ということを知らせる。この前置きによって読者は大雑把に十七世紀初頭へ導かれるわけであるが、さらに、すぐ、第1章の冒頭で年月日まで明示された『今日』という特定の日へ案内される。

第1章は、クナップの言う通り、「『今日、1611年3月14日』(Heute am vierzehnten März 1611) という正確な日付で始まるノヴェレの本来の枠筋 (Rahmenhandlung) である」⁴⁾。前置きという第一の外枠には物語の内容を暗示するようなものは含まれていなかったが、一般にそうであるように、この枠物語の第二の外枠である枠筋は枠内物語の予示に満ちている。

第1章の語り手はシャダウであり、第2章に1553年生まれとあるところからこの外枠の時点で58歳である。シャダウは持ち山の売買の件でボカルト老人のところへ行き、商談をまとめる。第一段落の「私のほうにも、老人の喜ぶことならば、なんでもしてやる、それ相応のわけがあり」(509) (Da ich[...]guten Grund hatte, ihm alles Liebe zu erweisen [...] (7)) という言葉から、シャダウの老人に対する何らかの負い目、責任の存在が感じられる。第二段落の「訪ねてみれば、古めかしい屋敷に、ぽつねんとして、ほったらかされた状態にいる彼にぶつかった。彼の灰色の髪の毛は、乱雑に額にかぶさり、首筋にたれさがっていた。」(509) (Ich fand ihn auf seinem altertümlichen Sitze einsam

2) S. ONDERDELINDEN: a. a. O., S.19.

3) G. P. KNAPP: Geschichte ohne Versöhnung. S.158.

4) Ebd.

und in vernachlässigtem Zustande.(7)) や、「彼は、老年になって、自分とともに家系が絶えて」(509) (uneingedenk daß sein Stamm mit ihm verdorren [...] (7)) という老人についての描写や叙述から老人に関する悲劇的事件が暗示される。第三段落の「私は[...]深く嘆息をした」(510) (ich[...]tief aufseufzte. (7)), 第四段落で老人の持ち物の中に、「二つの奇妙な物が、双方ともに私がもうあまりにもよく知りすぎている物」(510) (zwei seltsame, beide mir nur zu wohl bekannte Gegenstände (8)), つまり、「私」=シャダウと関連あるものが登場する。「フェルト帽」(Filzhut) と「アインジューデルンの聖母像の刻まれている、銀の、丸い大型メダル」(510) (ein großes rundes Medaillon von Silber mit dem Bilde der Muttergottes von Einsiedeln (8)) である。フェルト帽を修飾する「昔、一発の弾丸が貫いた、穴のあいた」(510) (ein durchlöcherter Filzhut, den einst eine Kugel durchbohrt hatte) (8) という言葉も忌まわしい事件を示唆している。第五段落の老人のアインジューデルンの聖母の力と息子ボカルトについての発言、第六段落の語り手の「彼の息子は、私の昔の仲間であり、私のそばで致命の弾丸を受けたのである。」(510) ([sein Sohn], der mein Altersgenosse gewesen und an meiner Seite tödlich getroffen worden war. (8)) という言葉は本筋の消尽点、悲劇の頂点を予示している。

しかし何と言っても重要なのが、最終段落の58歳のシャダウの言葉である。

Das Schicksal Wilhelm Boccas war mit dem meinigen aufs engste verflochten, zuerst auf eine freundliche, dann auf eine fast schreckliche Weise. Ich habe ihn in den Tod gezogen. Und doch, so sehr mich dies drückt, kann ich es nicht bereuen und müßte wohl heute im gleichen Falle wieder so handeln, wie ich es mit zwanzig Jahren tat.(8)

(ヴィルヘルム・ボカルトの運命は、私の運命と、世にも密接な、まず最初は快いぐあいの、次にほとんど恐ろしいともいえるぐあいの、かかり合いを持っていた。私が彼を死地におとしいれたのである。しかも、このことは、ひどく私の心を締めつけはするのだが、私はそれを後悔するわけにはいかないし、だぶん今日でも、同じ局面にぶつかれば、またしても二十歳の時と同じようにふるまうに違いないであろう。) (510f)

クナップは、この言葉は「いかなる解釈にとっても決定的である」⁵⁾ と言っているが、特に前半部分の予示は本作品の極めて多い予示の中でも枠内物語の本筋の予示として基本的なものである。読者は本来の悲劇の頂点までこの予示によ

って導かれる。いかなる状況においても、この予示は念頭から離れず、パノラマ的提示の場合はもちろんであるが、場面中心的提示の箇所において読者が作中人物と一体化するような語り状況 (Erzählsituation) の場合でも、読者はこの予示を忘れることなく、未来を知った作中人物と化す。それほどの影響力を持った予示であり、まさに根幹的予示である。

なお、オンデルデリンデンはこの第二外枠について、「一人称形式が保たれ、枠はしたがって次の回想の物語の動機付けの役に立つ。これで語り状況の招来という課題は充たされている」と言い、さらにこの枠でなされる予示の提供の際「読者がまだ拘束力のない冒頭の告知から章末の運命を孕んだ罪の告白へ導かれることによって、ある程度の緊張の高揚に成功する。」と指摘している。さらに、シャダウの思い出を語る切っ掛けについてのこの報告は本来の導入である、と、「導入部で目立つのは、導入部が、なされる告知の情報価値が徐々に増加するようにと、いかに入念に構成されているかということ、並びに、護符の機能がいかに重要であるかということである。護符はここですでに本来の、思い出を呼び起こす機会を示す、それどころか、思い出を呼び起こす機会を招来し、それから、後にはストーリーの決定的な転換点ではいずれのときでもライトモチーフ的に現れる。」と述べ、さらに二重の冒頭の枠について、「原稿の虚構はひどく断片的であり、非常に限られた機能しか持たない。それに対して、シャダウの報告は主として語り状況の動機付けであり、ちなみに枠が提供する諸々の可能性のうち、枠内物語のために役立つ可能性だけを利用している。すなわち、ヴィルヘルム・ボカルトの悲劇的運命の予示、ライトモチーフの導入、並びに、その後の彼の人生のある種の推論を可能にするもっと後の時点で生き残っている主要人物を見せること。形式の上からは第二枠はむしろ、[…] 主要物語のための導入である。そして内容的にも自立した枠物語とはまだ殆ど言うことが出来ない。二重枠付けは実際的には枠物語という技法の習得の途上におけるまだひどく躊躇しつつの第一歩であることが分かる。」と論じている。⁶⁾

3

第2章から最終章の第10章までが枠内物語である。第2章、第3章の舞台は故郷とその周辺、そしてパリへの途上である。本格的展開がなされる第4章か

5) G. P. KNAPP: Geschichte ohne Versöhnung. S.158.

ら第9章はパリで演じられる。終結的段階の最終章は故郷への途上である。

前章で第二外枠において枠内物語の予示がなされているのを確認し、なかでも根幹的予示を指摘したが、枠内物語においても数多くの予示がなされる。その中でも若いシャダウの行動の指針とも言うべき二つの予示がとりわけ重要である。そのひとつは第2章の第2シークエンスでなされる。

第2章の前話ではシャダウの出生から宣戦布告を待ち望んでいる状態までパノラマ的に語られる。第1, 第2シークエンスは、とも基本的には報告調ではあり、掴み取ってきたと言う感じが強いが、会話を交えた場面中心的提示の部分も多く、枠内物語の主要部への近さが提示法からもうかがわれる。

第1シークエンスのフェンシング教師の事件は、単なるエピソードのみに終わるのではなく、出郷を促す直接的原因のひとつとしてのほか、以後の筋の展開のために重要な要素を含んでいる。ひとつはフェンシングそのものが筋の第1の頂点である決闘に直結している。さらに、フェンシング教師自身と、この事件、すなわちシャダウが彼を官憲から救ったことが、最後にシャダウ自身を救うことになる。枠内物語にとって不可欠の事件である。

第1シークエンスに比べると、第2シークエンスの結婚式での殴り合いの事件は、出郷の直接的原因のひとつとしてはフェンシング教師の事件と同価値ではあろうが、後の筋の展開という点からは、一見すると、さほどの重要性は持たないように思われる。しかし、事件が起こる前の語り手の叙述には、無視できない未来の予示が含まれている。ひとつは、

Den Frauen gegenüber war ich schüchtern. Von kräftigem Körperbau und ungewöhnlicher Höhe des Wuchses, aber unschönen Gesichtszügen, fühlte ich wohl, wenn ich mir davon auch nicht Rechenschaft gab, daß ich die ganze Summe meines Herzens auf e i n e Nummer zu setzen habe, und die Gelegenheit dazu, so schwebte mir dunkel vor, mußte sich in der Umgebung meines Helden finden. Auch stand bei mir fest, daß ein volles Glück mit vollem Einsatz, mit dem Einsatze des Lebens wolle gewonnen sein. (15)

(女性にたいしては、私は、はにかみやであった。自分の心の総額を、一つのナンバーに賭けなければならない、という点についても、私は自分の弁明をしなかったとしても、たくましい体格、異常な背の高さ、だが美

6) S. ONDERDELINDEN: a. a. O., S.18f.

しくない容貌のことを私は十分に自覚していた。そして、一つのナンバーに賭ける機会ならば、と私の念頭にはおぼろげに浮かぶのであるが、私の英雄の身辺で見つかるに違いない、と。完全な大当たりは、全部の賭け金、生命という賭け金を賭けてこそ獲得されるであろう、ということも、私にとって不動の信念であった。) (517)

であり、もうひとつは、続けて述べられる、

Unter meinen jugendlichen Bewunderungen nahm neben dem großen Admiral sein jüngerer Bruder Dandelot die erste Stelle ein, dessen weltkundige stolze Brautfahrt meine Einbildungskraft entzündete. Seine Flamme, ein lothringisches Fräulein, hatte er vor den Augen seiner katholischen Todfeinde, der Guisen, aus ihrer Stadt Nancy weggeführt, in festlichem Zuge unter Drommetenschall dem herzoglichen Schlosse vorüberreitend. /Etwas Derartiges wünschte ich mir vorbestimmt. (15)

(私が若いころに驚嘆した人たちのなかで、偉大な提督と並んで、彼の弟のダンドロが第一位を占め、彼の、世に評判となった、壮大な、花嫁出迎への旅行は、私の空想力に火をつけた。彼の愛人である、ロレーヌのある令嬢を、彼は、カトリック教徒である宿敵のド・ギーズ家の人たちの目前で、美々しく行列を組み、トランペットの響きのうちに、ド・ギーズ公の居城のかたわらを騎乗しながら、彼らの都市ナンシーから連れ去ってきたのである。/このようなことが、自分の身に予定されているよう、と私は願った。) (517)

という言葉である。

この二つの予示はどちらも、後に実現するシャダウのガスパルドとの結婚と彼女を連れてのショーモンへの帰郷を考慮すれば、これまたその重要性が認識される。特に后者の予示は枠内物語におけるシャダウ個人の行動について指針となるものであり、第1番目の主導的予示と言いうる。

この予示は原則的には若いシャダウの立場からの予示であり、彼の願いの実現は必ずしも確定的なものではないが、しかしシャダウはこれを夢に描いて行動する。そして、若いシャダウの立場からの予示ではあるが、その背後に冷静な「語る私」が感じられ、若い夢の実現の可能性が保証されているかのようで

ある。若いシャダウは、文字どおりこの予示に導かれるような行動をする。

ところで、二つのシークエンスの機能のひとつとしてクナップは「中心人物の特定の性格的特徴をスポットライト的に照らし出すこと」を指摘している。つまり、剣さばきの鈍(のろ)さと暴力行為である。「シャダウという個人においてははっきりした鈍さがファナティズム及び不思慮な暴力行為への傾向と結びつく、ということである。いたずらに彼の手本が提督の早死にした弟、ダンドロと呼ばれたフランソワ・ド・コリニであるのではない。この人はさまざまな冒険的行為や無鉄砲によって有名になっていた。」と述べている。¹⁾

第3章以降、シャダウは第二外枠で言及されたボカルトと出会う。彼が、筋の中心の世界の他の人物たちへの最初の導きの役を果たすことになる。議会顧問官のシャティヨンと少女(ガスパルド)を紹介される。シャティヨンという名と「私はあの方を知っており、身分と個人的価値との相違が許すかぎり、親しくしております。」(521) (ich kenne ihn und bin ihm befreundet, so weit es der Unterschied des Standes und des persönlichen Wertes gestattet. (19)) という言葉や、さらにガスパルドの素性に関して、また、シャダウの「目標」において、提督やダンドロについて言及され、核心的世界への接近が感じられる。

天候がひとつの役割を果たすことにより、後には消極的としか評されない行動をする主人公が、まず非常に対照的なボカルトと人間関係が結ばれ、ボカルトによりさらにシャティヨン、ガスパルドと繋がる。次の核心的人物コリニへと導くのがこの老議会顧問官と少女である。すでにこれまでにコリニ、ダンドロについての主人公の関心の強さが述べられているので、読者には提督コリニとの出会いがこの作品にとって最も重要な出会いの一つとなるであろうと予想されうる。

第4章で提督を訪問し、提督の下に地位を得ることになり「宿願の目標」が達成される。また、ガスパルドの素性——父は提督の弟ダンドロ、母はドイツ騎兵隊のある将校の娘——が解明する。シャダウは、第一の主導的予示にあったように、ガスパルドの愛の獲得を運命とみなし、命を賭ける決心をする。

Daß ich Gaspardes Liebe gewinnen könne, schien mir nicht unmöglich, Schicksal daß ich es mußte, und Glück. mein Leben dafür einzusetzen. (37)

1) G. P. KNAPP: C. F. Meyer. Das Amulett. S.69.

(私がガスパルドの愛を獲得するかもしれないことが、私に不可能でな
いように思われた、私がそうしなければならないのは、運命であった、そ
して、そのために私の命を賭けることが、幸福なのであった。) (539)

第6章の決闘の後、事実ガスパルドの愛を獲得する。筋の流れから見ると、決
闘が第1の頂点であって、ガスパルドの愛を獲得したことで第一段落が終わる。

第二段落の第7章、第8章、第9章はバルテルミーの日とその翌日の出来事
であり、密接に繋がっている一つの大きな物語相であり、この作品の最も主要
な相である。ただ、クナップは、ボカルトの時間陳述は正しくなく、「実際は8
月23日の晩である。」と述べているが、作中人物のボカルトが「バルテルミーの
日だ」と言い、他の作中人物や語り手のそれに関する発言は無い。ボカルトの
言葉通りだとすると、この大きな物語相は8月24日に始まり、8月25日の午後
に終わることになる。

前段でガスパルドの愛を得たシャダウは提督のもとで結婚することになるが、
シャダウに向かって言われる提督の言葉はシャダウとガスパルドの今後にとっ
て決定的である。

„Schadau, Ihr werdet Eure Kriegsschule nicht unter mir durchma-
chen. Hier sieht es dunkel aus. Mein Leben geht zur Neige und mein
Tod ist der Bürgerkrieg. Mischt Euch nicht darein, ich verbiete es
Euch. – Reicht Gasparde die Hand, ich gebe sie Euch zum Weibe. Führt
sie ohne Säumnis in Eure Heimat. Verlaßt dieses ungesegnete Frank-
reich, sobald Ihr meinen Tod erfahrt. Bereitet ihr eine Stätte auf
schweizerboden; dann nehmt Dienste unter dem Prinzen von Oranien
und kämpft für die gute Sache!“ (55)

(「シャダウ、あなたは、あなたの兵学校を、私のもとでは卒業しないであ
ろう。ここは、見込みが暗い。私の命は衰えつつあり、私が死ねば内乱が
起こる。内乱に参加してはなりません。私はあなたにそれを禁止する。ーガ
スパルドとの結婚を承知してください。私はこの子をあなたの妻に差しあ
げる。ためらわずに、この子をあなたの故郷に連れて行きなさい。私が死
んだという知らせを聞いたならば、すぐさま、祝福のないこのフランスを
去りたまえ。この子のためにスイスの地に居場所をしつらえてやってくれ
たまえ。それからオレンジ公に仕えて、善事のために戦いたまえ！)」 (556
f.)

この提督の教示はシャダウの行動にとって第2番目の主導的予示である。先に指摘した第1番目の主導的予示と重複する部分もあるが、これに加えて、この予示はより具体的な指針である。これ以降、シャダウはこの言葉の通り行動し、妻ガスパルドを連れてスイスの故郷へ帰る。

ただし、事は簡単に運ぶわけではない。聖バルテルミーの夜はボカルトとピファー中隊長の配慮によりシャダウは監禁される。

ボカルトの「今日は、バルテルミーの日だ。」(559) („Heute ist nun Bartholomäustag“(58)) という言葉でわれわれはいよいよ筋の頂点が目前であることを知るが、宮殿でボカルトの部屋に監禁されたシャダウはこれまでと同じように、危機的状況のある程度は認識するが、まだどこか甘く、いわば緊迫度、切迫度というものを感知できない。監禁されたことにより、具体的な行動に出ることは出来ないが、それに代わって精神的な動きの場となる。

監禁状態のシャダウの周辺の主要な出来事は、真夜中に彼のすぐ近くに国王、その弟アンジュー公、太后の姿を目撃することである。警鐘や射撃の音によってシャダウはやっと事態を的確に推測する。「言語道断のことが行われているのであろうか？パリのユグノーは、皆、暗殺されるのであろうか？」(563) (Geschah das Unerhörte? Wurden alle Hugonotten in Paris gemeuchelt? (62))
もう一つの重要な場面は、河の女神と石の女（カリアティード）の対話である。夜が白み始めたとき、シャダウは「目ざめとまどろみとの中間の状態に」(563) (in einen Zustand zwischen Wachen und Schlummern (62)) 陥る。石の女をつぶやきは真理を突いている。「彼らが殺し合っているわけは、浄福に達する正しい道について彼らが一致しないからさ」(564) ([...] sie morden sich, weil sie nicht einig sind über den richtigen Weg zur Seligkeit.(63))。彼女の表情は「そして、彼女の冷たい顔は、まるで法外な愚行を笑うかのよう、ゆがんで、あざ笑いを浮かべた。」(564) (Und ihr kaltes Antlitz verzog sich zum Hohn, als belache sie eine ungeheure Dummheit...(63)) と描写されている。ちなみに、エヴァンスはこの石の女の言葉を「このノヴェレの世界観的核心的言表である」²⁾と断言している。

クナップは、この作品には全部で五つの語り技法上の挿入があると述べている。そして、「マイアーの語り方法にとって特徴的であるのは、ある種の挿入である。枠の語り手なる人物 [=58歳のシャダウ] とは別の人物のパースペクティブから報告される — 物語の内部の物語 — 挿入か、あるいは、夢やタイヒヨスコピーや会話を意図せずして耳にするという手段で、直接生起自身から導いてくることの出来ない本質的情報をもたらす挿入である。」と言う。その五つ

とは、第1は、子供のころ麻痺したボカルトの奇跡的な治癒に関するもの、第2は、シャティヨンがシャダウに伝えてくれる提督の政治的目標についての情報、第3は、シャティヨンがシャダウに明かすガスパルドの素性、第4は、ルーブルの、近くのバルコニーの国王、王母そしてアンリ・ド・アンジューの場面、第5が、シャダウが一種の半睡半覚の状態で聞く、屋根を支えている石の女と河の女神との間の会話、である。³⁾

そして特に、第4と第5の挿入を含んだ第7語りシークエンスについて、クナップは、「さまざまな筋の技法上の頂点を入念に計算して互いに配列し、大きな歴史的生起をそれに逢着した個々の運命と渾然一体として溶け合わせる作劇法的な構成で、第7の語りシークエンスは物語の名人の業を示している。その他さらにマイアーは、筋の静的な部分——シャダウの囚われ人としてのルーブルの滞在——を二つのタイヒヨスコピーによる挿入によってシークエンスの真の頂点として加工するのに成功する。この真の頂点の発言力は生起全体を光で覆っている。簡潔さと、注目に値する充溢した素材の輝かしい組織化の点で、この語りシークエンスは19世紀のノヴェレ技法の最高の成果のひとつである。」⁴⁾と称賛している。

さて、この描写の直後、ボカルトが二人の部下と共にやって来て、シャダウは彼から状況を聞いた後、「アインジューデルンの聖母のみ名において」妻ガスパルドの救出を懇願する。

第9章は一連の出来事であり、顧問官の家でのガスパルドの救出とボカルトの死、市門でのかつてのフェンシング教師との出会いと脱出となり、予示の通り、フランス（パリ）を去って、第10章で、スイスのショーモンへ向かう。ただ、この予示の最後の部分である「オレンジ公に仕えて、善事のために戦いたまえ！」は、枠内物語にも、第1章の外枠においても言及されていない。おそらく、言に従ったであろう、と推測し得るのみである。

なお、子供の頃ボカルトの麻痺を治し、決闘でシャダウの命を救った護符、すなわち、アインジューデルンの聖母像の刻まれている銀のメダルは、最後にボカルトの命を救うことが出来ない。老ボカルトは邪宗の出現のせいと言っているが、オンデルデルンデンは、「護符の全能的な効果を本当に信じているボカルトが死に、一方、この力をただ限定して利用するシャダウが生き残るというこ

2) Tamara S. EVANS: Formen der Ironie in Conrad Ferdinand Meyers Novellen. Bern und München: Francke 1980. S.18.

3) G. P. KNAPP: C. F. Meyer. Das Amulett. S.70ff.

4) Ebd., S.78.

とは、もちろんフェチシズムの疑わしさを暴露するが、しかしまた、より高い神の全能は人間の信仰が期待するのとは違った尺度をあてるといふことの証しでもある。』⁵⁾と解している。『護符』の世界はメルヘンの世界ではなく、より現実的な小説の世界なのである。

4

この作品においては外枠、枠内のどちらにおいても盛んに予示がなされると述べたが、枠内物語にある予示では、クナップは次のように16の予示を列挙している。¹⁾

1. Den Frauen gegenüber [...] (15) (「女性にたいしては [...]」) (517)
2. Etwas Derartiges [...] (15) (「こういうようなことが [...]」) (517)
3. [...] über denen aber ein schweres Gewitter hing (18) ([...] それらの塔の上空には、重苦しい雷雲が漂っていた) (519)
4. Die Freude, an ein ersehntes Ziel [...] (28) (「宿願の目標に、これほどたやすく達したという喜び [...]」) (530)
5. Die Königin Mutter ist zweideutig [...] (30) (「太后はどちらつかずで [...]」) (531)
6. War es nun das ansteckende Gift [...] (35) (「伝染性の毒 [...]」) (537)
7. Ist die Predigt vorüber [...] (37) (「説教は終わったのかな [...]」) (539)
8. Daß ich Gaspardes Liebe [...] (37) (「私がガスパルドの愛を [...]」) (539)
9. Während ich meinen Heimweg einschlug [...] (40) (「家路をたどりながら [...]」) (542)
10. Gott gebe, daß es dabei bleibe [...] (50) (「それが長続きさえすればよいのですが [...]」) (551)
11. [...] wer kann wissen, wie das endet [...] (53) (「[...] どんなことになりゆくか、だれにわかりましょうか [...]」) (554)
12. Ist denn eine Verschwörung [...] (54) (「いったい、われわれユグ

5) S. ONDERDELINDEN: a. a. O., S.69f.

1) Vgl. G. P. KNAPP: C. F. Meyer. Das Amulett. S.79.

- ノーに対する陰謀がめぐらされているのでしょうか […]」) (555)
13. Meine Zeit ist gemessen […] (55) (「私の余命は定まっている […]」)
(556)
14. So bleibe auch ich […] (56) (「では私もとどまろう […]」) (558)
15. Der rote Abdruck des Siegels […] (58) (「封印の赤い押し型 […]」)
(558)
16. In dieser kurzen Frist […] (60) (「この短時間のうちに […]」) (561)

これらの予示は、クナップの指摘するように「生起の結合」の役に立つ要素の一つであり、いわば「錠で固定する」のである。²⁾このうち前章で、1, 2, 8をまず取り上げ、特に2を第1の主導的予示、次いで13に関する部分を第2の主導的予示と呼んだ。クナップは、このような予示やさらには、われわれが触れることが出来なかった、モチーフの多用について、それが「テキスト全体に少しわざとらしい、「作られた」という性格を与える。全体として写実的で、経験的にわかる真実らしさに留意した物語の形成はこの多数の語り技法上の技巧に直面すると物語の迫真性と説得力の一部——たとえ僅かであれ——を失う。数を減らした方がかえって良い結果となったであろう。」³⁾と言っているが、マイアーにとっては新教徒の直面するパリの深刻な状況を読者に描くには、いくら予示を重ねてもまだ尽きない思いであったのであろう。

ところで、この作品はバルテルミーの夜の虐殺を舞台背景にしているわけであるが、このような史上よく知られた事件の場合、その事件そのものはもちろんであるが、事件に関連する出来事や人物もまた、その出来事や人物自身だけで物語上の機能としてその事件の予示の作用があることに注目しなければならない。いわば、史実の予示である。この史実の予示の作用について考察してみたい。

史実の予示は通常は史実が主語的である。つまり、史実が予示する。C.F.マイアーの作品では『ユルク・イエナッチュ』がこれに当たる。ユルク・イエナッチュは歴史上の人物であり、その生涯は周知されている。あるいは『聖者』のトマス・ベケットのヘンリ王との確執なども同様である。もちろん小説であるから虚構が入り込む十分な余地があるが、イエナッチュやベケットの悲劇的な死は動かしがたい。そして、その名を聞くと、この事実は念頭に浮かび決して脳裏を去らない。

2) Vgl. ebd.

3) Vgl. ebd., S.82.

『護符』の場合はどうであろうか。例えば第二外枠のあの根幹的予示の前後に「あれは1572年聖バルテルミーの日であった。」とでも言われておれば、この主語的史実の予示であったであろう。しかし、われわれのテキストにはそのような言葉はない。「1572年聖バルテルミーの日」は伏せられたままである。すなわち、史実の予示の史実が目的語的であって、史実を予示する方である。

まず、一般にはこの「聖バルテルミーの虐殺」事件はどの程度知られているのであろうか。もちろんヨーロッパの国々とわれわれとは知識の程度に大きな差異があるであろう。わが国の最近の一般向けの歴史書の一つでは「聖バルテルミーの虐殺」について次のように記述されている。

「長い宗教戦争の最悪の場面は疑いなく、聖バルテルミーの虐殺であろう。その二年前の一五七〇年、サン・ジェルマン・アン・レーの和議が成立し、新教徒は大幅な信教の自由を認められた。このように新教徒にとって有利な状況のなかで、プロテスタントのコリニー [=コリニ] 提督が国务会議のメンバーとして迎えられる。コリニーは、フランスがネーデルラントのカルヴァン派を支援するよう、国王シャルル九世に執拗に迫る。スペインとの対決を望まないカトリーヌ・ド・メディシスは提案に反対し、コリニーの暗殺を決意する。聖バルテルミーの祭日に当たる一五七二年八月二十四日が、その実行日に選ばれる。コリニーはこうして、新教徒の有力な指導者の一人、アンリ・ド・ナヴァル（のちの国王アンリ四世）とカトリーヌ・ド・メディシスの娘マルグリットの婚礼に参集したカルヴァン派貴族数十名とともにパリのルーヴル宮で殺害される。だが、これで事件が、終わったわけではない。その後三日間にわたってパリのカトリック教徒の民衆が、二〇〇〇とも三〇〇〇ともいわれるプロテスタントを襲い、虐殺したからである。[...]」⁴⁾

われわれは今、このようなバルテルミーの夜の虐殺がどのように予示されているか、テキストを追ってみよう。

第1章の冒頭の「今日は、1611年3月14日」という時間陳述では、まだ1572年との関連は予想され得ない。アインジーデルンの聖母や老ボカルトの「邪宗」等の発言もまだ同様である。第2章の冒頭、主人公の生年が1553年と告知される。第1章末の「二十歳のときに」という言葉と結びつけて考慮すれば、歴史上の事件との近さが匂うかもしれないが、それはまだ敏感な読者だけであろう。しかし、「偉大なコリニ」の名はもう十分に「バルテルミーの夜」を読者の頭に浮かび上がらせる。コリニこそあの事件の最初の犠牲者なのであるから。

4) 長谷川輝夫・大久保桂子・土肥恒之著『ヨーロッパ近世の開花』 世界の歴史 第17巻 中央公論社 1997年 S.54f.

コリニに言及された同じ段落に1567年に「私」シャダウが新教の軍隊に編入されたことが報告された後、次の段落の最初に、1570年、サン・ジェルマン・アン・レの講和の勅令によりコリニがパリに召還され、王とネーデルラント解放の対アルバ戦の計画を協議しており、シャダウは宣戦布告を待ち望んでいると語られている。この待ち望んでいる今が何年であるかは語りのこの時点では明確ではない。この後、シャダウが出郷しなければならなくなる二つの出来事、フェンシング教師の件とフランツ・ゴディラルトの件が報告され、「戦争の開始をパリで待ちたい」(519) ([...] ich den Ausbruch des Krieges in Paris erwarten möge⁽¹⁷⁾) とフランスへ出発する。フェンシング教師の件が何年に起こったのか、1570年なのか、それ以後か不明である。ゴディラルトの件も、フェンシング教師の件の後であることは確かだが、どれくらい後なのかは、語りのこの時点では分からない。

ただ、第2章末と第3章の冒頭の記述から、ゴディラルトの件はパリへの途上やそれ以後の本筋の時間と接続していることが分かる。つまり、本筋も1570年なのか、あるいは二三年経過した後なのか、筋の現在の正確な年号は語りの今の時点では分からない。第3章の「提督さまは、目下、フランドルの戦争を控えて、日夜多忙で、せがまれ、休みなしでいらっしゃいますし [...]」(529) (Der Herr Admiral ist jetzt, am Vorabend des flandrischen Krieges, vom Morgen bis in die Nacht in Anspruch genommen, belagert, ruhelos [...]) (26)。というガスパルドの言葉や、さらには、シャティヨンがシャダウに話してやる新教徒の二つの道や提督の「カトリック教徒とユグノーとか結託して」(531) (Katholik und Hugentott Seite an Seite⁽²⁹⁾) の戦争の選択、それに対するド・ギーズ家の人たちの動き、どちらつかずの太后などについての叙述から、歴史に詳しい読者なら1572年と察知するかもしれない。第5章の提督の書簡、第6章のシャダウの「フランドルに投入されるユグノーの義勇兵団の装備に関する計算書」(549) (Rechnungen [...], die sich auf die Ausrüstung der nach Flandern geworfenen hugenottischen Freischar bezogen^(48f.)) でさらに明白になってくる。第7章の冒頭の「シャルルの魅力はあるが軽率な妹とナヴァラ王との結婚」(Die Hochzeit des Königs von Navarra mit Karls reichzender, aber leichtfertiger Schwester), 「結婚式の当日」(553) (Am Hochzeitstage selber⁽⁵²⁾) で1572年であることが決定的となり、次いで提督の負傷がジルベールより告げられる。ボカルトははっきり「今日は、バルテルミーの日だ」と言う。

小説の読者は小説の物語を虚構と知りつつも、その虚構の世界に導かれてあたかも現実の出来事のように接し、出来事の成り行きや登場人物の運命などに

関心を示す。また、よく言われるように、小説の世界は一個の完結した世界であって、現実の世界とは一線が画されている。だか、小説の出来事が現実の出来事に基づいたものであったり、現実の出来事を背景としている場合には、その現実性の重みははるかに増す。とりわけ、この作品の聖バルテルミーの日のような衝撃的な史実の場合には、読者の受け取り方も深刻である。

語り手としてのシャダウは1611年、1553年、1567年、1570年とはっきり年号を告げたり、細かな時間陳述をしたりするにもかかわらず、肝心のパリへ向けての出発の時を故意に1572年と言わず、今述べたように、フェンシング教師の件とゴディラルトの件から、しばらく読者の推測に委ねている。コリニ提督についての叙述やパリの新教徒の深まり行く状況の悪化を短篇の物語としては異常なほどいろいろな形で告げることによって次第に1572年を悟らせるという手法を取っている。

1572年という年号の予示のほか、聖バルテルミーの虐殺の原因である宗教間の対立の記述に目を向けてみると、新旧両宗教の対立はすでに第二外樺の老ボカルトの言葉「だが、邪宗が現れて […]」(510) (aber seit die Ketzerei in die Welt gekommen ist […] (8)) に現れている。樺内物語においては枚挙にいとまがないほどであるが、クナップの16の予示にも含まれているが、それ以外の主なものを拾ってみるだけでも、第2章のおじと村の牧師、第3章のシャダウとボカルトの論争、第4章のセルヴェトゥスをめぐるシャティヨンとシャダウの会話、さらに、パニガローラ神父の説教、第5章の提督のオレンジ公に当てた覚書等々、次々に目に留まる。これらも「聖バルテルミーの虐殺」という史実を予示する史実の予示である。読者にはじめから聖バルテルミーの虐殺と告知せず、何度も宗教的対立の問題を取り上げつつ、聖バルテルミーの日へと追いつめていくような手法を取っている。読者は重苦しく予感しながら徐々にその予感の的中へと追い込まれて行く。いきなり、聖バルテルミーの虐殺を告げられるのも衝撃度は高いであろうが、このように何度も執拗に予示を重ねて否応なく追い込んで行く技法もまたはなはだ効果的な技法である。

5

『護符』は一人称の物語である。ただし、すでに述べたように、前置きの語り手の「私」と第1章以降の語り手の「私」は同一人物ではなく、前者が編者あるいは作者C.F.マイアーを装った語り手であり、後者は58歳のシャダウである。普通、語り手は自己の語る物語のどの時点においても、その気になりさえ

すればいくらかでも介入することが出来る。58歳のシャダウはもちろんであるが、編者あるいは作者マイアーを装った語り手も同様である。この前置きの語り手について、オンデルデリンデンは、「原稿の虚構は中断のためのさまざまな可能性を提供する。それで、言うところの伝承されてきて今再現される文書は報告者に失われたものについての推測を可能にする空隙を示しうる。また、枠の語り手は原稿を「書き移すこと」を中断しうる、注釈を挿入したいためであれ、緊張という理由から枠内の筋を一瞬止めたいということであれ。すべてのケースにおいて […] 読者にはそのような箇所でもさきく原稿の虚構が再び思い出させられるということと副次的意図あるいは少なくとも副次的効果が結びつけられている。」しかし、『護符』では原稿の虚構は極端に限定された機能しか持たない、「現代の言葉の動機付けに限られたままである」と言う。¹⁾

また、第1外枠について、主たる課題は物語の現代語の弁解にあると論じた後、さらに彼は、「これはC.F.マイアーという新米の語り手による語り手の自由のまさしく感動的な誤解を示唆している。C.F.マイアーという新米の語り手は、歴史短編小説で現代の言語を使用するには詫びを言わねばならない、とまだ思っていた。」²⁾と述べている。

確かに弁解も含まれているであろうが、この短い前置きには、「黄色に変わった古文書」というだけでもそこには発見の労苦と喜びの秘められたドラマが感じられるし、いくらかの神秘性も呼び起こしうる。虚構とはいえ、読者にそのような訴える力、イメージ喚起の力はある。虚構の語り手には発見に対する誇りがあり、現代語に直すというだけで、読者に対する優越があり、読者は虚構と知りつつもいくらかの負い目やありがたさを感じるようにしむけられる。

一般に、前置きがあり、さらに枠物語となっている小説の場合には、普通は、前置きの語り手、枠の語り手、枠内物語の語り手というように、三人の語り手が存在する。『護符』の場合には枠、つまり第二外枠も一人称の物語であり、さらに枠内物語も一人称の物語である。第二外枠は語りの次元と筋の次元の時間的距離である語り距離が小さく、語り手の「私」(「語る私」)も、登場人物である筋の次元の「私」(「体験する私」)も58歳のシャダウである。枠内物語の場合は語り距離は約40年、語り手である「私」(「語る私」)が58歳のシャダウ、筋の次元の「私」(「体験する私」)が19歳のシャダウである。従って、『護符』では、第一の語り手が編者あるいは作者C.F.マイアーを装った語り手、第二の語り手が58歳のシャダウ、そして第三の語り手も58歳のシャダウである。以下、第二、

1) S. ONDERDELINDEN: a. a. O., S.32.

2) Ebd., S.18.

第三の語り手をまとめて、第二の語り手シャダウと呼ぶことにしよう。

オンデルデリンデンが言うように、第二の語り手である58歳のシャダウを越えて、編者として、より高い次元から物語に介入しうる第一の語り手は、前置き以後全く直接は入り込むことはないことは、すでに述べた。

第2章以降、若いシャダウの世界を58歳のシャダウが語る。語り距離である両者の時間的距離が約40年、そこには当然シャダウの「成熟」か考えられるはずである。しかし、一般には、58歳のシャダウには反省の色が薄く、若いシャダウと語り手シャダウの間には精神的成長がないと言われている。果たしてそうであろうか。

まず語り距離であるが、最初は報告調であり語り距離が感じられるが、オンデルデリンデンは、「しかし、筋がより劇的になり、事件が次々と起こり、悲劇的な頂点へ動いていくとき、たとえそれが思い出の報告に相応しかろうとも、語り距離は大幅に失われる。」と述べ、いろいろ介入する機会はあるはずであるが、そのようなものはひとつとして無く、「語り現在への唯一の逆戻りだけがある」と言い、例のバルテルミーの夜のアンジュー公と太后と一緒にバルコニーに居る王の姿の描写の際の語り手の言葉、「私が、とうの昔に過ぎ去った事柄を書き下ろしている今、私の心眼には、この不幸な男の姿がありありと浮かび—私は身ぶるいに襲われるのである。」(562) (Jetzt da ich das längst Vergangene niederschreibe, sehe ich den Unseligen wieder mit den Augen des Geistes—und ich schaudere.(61)) を挙げ、これは「すでにもう強烈な効果を追加的に強めるという目的を持っている」と言っている。³⁾

オンデルデリンデンは「枠の冒頭に含まれる後話のほのめかし、とりわけ、語りの時点でのシャダウの意識の状態についてのほのめかし」から、「現在の語っている者と40年前の体験している者との間には基本的相違はないということ、彼の中で内面的変化 […] は行われなかったということ」が証明されるという。そして「現前化する語り方は内面的必然性があるとして説明が付く。つまり、精神的にさらに発展することがなかったので自分の体験に対して距離をとることが出来ず、自分の体験を距離を置いて注釈を加えながら再現するということができない。このノヴェレにおいては枠物語の本質的な諸々の可能性が顧慮されないままであったということは異論の余地はない。同様に、形式上の手段のつましきは内容にその対応を見出すということは、否定できない。すなわち、形式上の制限は語り手シャダウの精神的偏狭の表現手段である」と結論づけて

3) Vgl. S. ONDERDELINDEN: a. a. O., S.32f.

いる。⁴⁾

クナップも、「はるか以前の出来事が、たとえ彼を依然としてまだ苦しめているとしても、[...]その出来事は彼の自覚の中に何ひとつの変化ももたらさなかった。枠内物語の19歳（20歳ではない！）の主人公を殆ど40年後の枠物語の年代記作者 [=58歳のシャダウ] から分けている成熟の過程は、したがって、問題にならない。」⁵⁾、また、「テキストで偏見のない、ヒューマニズムの寛大さを具現しているコリニ、シャティヨン、ミシェル・ド・モンテーニュという三人のグループに、シャダウは全く理解することなく向き合っている。彼には至る所で洞察と感受性が欠けている。」⁶⁾、さらに、「殺戮の夜の犠牲者たち、ボカルト、コリニ、シャティヨン、また最後に仕立屋ギルベールとその家族のためには [...] 彼は永続的な同情は殆ど持っていない。[...] 予定説の信奉者であるノヴェレの主人公は結局は遺族の苦しみについては感情を動かされないままである。[...] シャダウは、彼の盲目さという点に、冷酷な、硬直した、保守的な個性の、時代を超越したタイプ [...] を具現している。」⁷⁾と断じている。

このような見解がなされる一方、タマラ・S.エヴァンスは次のように述べている。

「シャダウの本質においておじから影響を受けた側面を追ってみると、「心」が長い間抑圧されたままであること、そして「心」が物語が進むにつれて、さしあたりただほかの人間の中にだけある愛情と寛容として警告しながら彼に立ち向かう、なかんずくボカルト、シャティヨンおよびモンテーニュにおいて、ということが明らかになる。これらの人々はみな模範としてシャダウの傍らを列をなして通り過ぎ、彼に影響を及ぼす。彼らから彼は、自分の立場とは違うがだからといって退けるべきではない立場があり得る、ということを知った。彼がこれらの手本となる人々に出会い、彼らから学んだ後、今ようやく、石の女と一緒に夢みるように、彼は内面的にも十分成長している。パルツィファルのように、彼は中庸が何であることを学び知る。そしてこの人たちからシャダウは、本来おじを通して始めから彼に持たせて貰っていたものを実際の生活にも活かして生きることを学びとる。詳しく述べることなく詩人ははっきりとシャダウの内面的人間形成の過程の諸段階を指し示す。すなわち、危機に陥ったときには彼は聖母マリアの名において助けを懇願し、この深い危難のときに

4) Vgl. ebd., S.100f.

5) G. P. KNAPP: Geschichte ohne Versöhnung. S.158f.

6) Ebd., S.160f.

7) Ebd., S.162.

初めて心をして話させる。彼は何年かの後、老ボカルトとの商談の際、正統信仰の徒についてのこの老ボカルトの偏狭な発言を、かつての彼のおじのレナートのように「自己否定」してただ無視するのではない。狂信的にいきり立つ代わりに、「心が痛む」、そしてひねくれた、孤独な老人のためにさらに慰めの言葉を見つける。パリへの旅はただの冒険旅行ではなく、人間形成旅行となった。」「シャダウは二重の相続人として故郷へ入る。すなわち、土地の相続人としてそして彼のおじの精神的遺産の相続人として。彼がたった今到達した市民階級 […] は決してネガティブに評価されるべきものではない。」「シャダウが「市民」へと育つのは、それは、彼が「心」と「悟性」の間に、つまり、彼の人生行路の始めに模範的におじと村の牧師によって代表されるが、彼自身においては差し当たりまだ不均衡に配分されていたあの二つの相反する要素の間に、釣り合いを見出すということの意味する。シャダウの帰郷は、さらに、不寛容で狂信的であることをやめたということの意味する。」⁸⁾

小説の語り技法上、視点の問題と近接して重きを成しているのが語りの基調である。三人称小説の場合には語り手が自ら意見を持って前面に登場するか、あるいは陰に隠れて物語自身をして語らしめるようにするかであるが、一人称小説も同様であって、「語る私」が前面に出るか、隠れるかである。木村毅氏は「作家は創作の一要素として、自らの個性的調子を誇張することも、抹殺することもできる。」と言い、前者を「個性格的基調 (Personal Tone)」, 後者を「没個性的基調 (Impersonal Tone)」と呼んでいる。個性格的基調では「読者に向かってざっくばらんに、自分が作者であり、作中人物を第三人称にて操縦している者は自分なることを、表明して憚らない。彼等は、作品に遠慮なく個人的陰影を印し、自分の特殊な趣味批判を披瀝し、一刻も読者をして自分が話者であるの念を忘れしめない。読者は常に作者の眼をとおして物語に顕るる物象を見ることを強いられる。サッカレーの作風は常にこの派の代表ともいうべく、作者は作中人物を、あるいは憐れみ、あるいは賞讃し、あるいは愚弄し、あるいは敬愛し、読者が自由に批判する機会はず刻といえども与えない。」これはもちろん一人称小説の場合も同様である。C.F.マイアーの作品では『聖者』が一人称小説であり、ここで述べられているサッカレーのように「読者が自由に批判する機会はず刻といえども与えない」という程ではないが、個性格的基調の濃い語りと言えるであろう。また一方、『イーリアス』、『オデュッセイア』、『ベーオウルフ』、『ニーベルンゲンの歌』などの没個性的基調の作品では、物語は「そ

8) T. S. EVANS: a. a. O., S.28f.

れ自身が物語ったかのようなのである。換言すれば、誰の視点からも、何者の視点からも眺められていない。」と述べている。一人称小説においては語る私が語り手の立場からの注釈、解説や省察、反省、意見などを加えない場合がこれ、あるいはこれに近いと言えるであろう。「自己抹殺派に属する作家は、作中人物に下さるべき読者の独立的批判を阻害しないために、努めて自らの所見は隠蔽しようとする。しかし個人格的基調に則って著述する作家は、あるいは作中人物の功績を嘆美し、あるいは彼等の愚昧を嘲笑するなど、自己の所見を暗示し—いや直接に表明することにも決して躊躇せぬ。」⁹⁾

語る私が意見を持って前面に出ることが唯一の例外を除いて無く、主要場面においては専ら体験する私の視点から提示されている『護符』は木村氏の言う没个性的基調であろう。事実、パノラマ的な繋ぎの報告の部分においても語る私は意見を述べていない。しかし、語る私が、いわば、沈黙しているからと言って直ちにシャダウに成長がないといえるであろうか。語り手は物語技法上から、体験する私からのパースペクティブによる提示の方が劇的であり、その方の効果がいいと判断したのであるであろう。たしかに、語る私が強く介入すると、このストーリーの場合懺悔調になってしまうのではないだろうか。語る私の立場からのコメントの欠如によって主要場面での提示の一元化が目差され、「起こった出来事の持続的な現前化」¹⁰⁾が達成されていると評価できる。

例えば人物についても、コリニやシャティオン、モンテーニュなどシャダウの手本となる人物に対して、また、善良な友人ボカルトに対しても、確かに「語る私」の立場からの賞賛や感謝の言葉などは何もない。また逆に、若いシャダウに敵対したゴディラルト、ギーシュについても、旧教徒側の狂信的なパニガローラ神父についても何の論評もない。

明らかに悪人と思われる人物も登場している。モンテーニュとシャティオンという善人と対照的な二人の悪人フェンシング教師とリニェロルである。リニェロルはいわばギーシュ伯爵の腰巾着であり、細い路地でシャダウとボカルトとギーシュ伯が行き会うときにも付き添っていた。その後決闘の際にはギーシュ伯の介添え人であり、決闘で命を落としたギーシュ伯を邸宅へ送り届ける。シャダウにとってはリニェロルは「公然の注目をけっして自分の身に向けない、千もの十分な理由」(547) ([...] er tausend gute Gründe hat, die öffentliche Aufmerksamkeit in keiner Weise auf sich zu ziehn.⁴⁰⁾)をもった男であったことが、決闘の後では好都合であった。しかし、ガスパルド救出の際にはリニ

9) Vgl. 木村毅著『小説研究十六講』 恒文社 1980年 S.283ff.

10) S. ONDERDELINDEN: a. a. O., S.95.

ェロルによって新教徒であることを暴露され、危険にさらされ、結局ボカルトも新教徒とみなされて射殺されてしまう。「語る私」シャダウにとってはまさしく恨み事のひとつも言いたくなって当然の人物であるが、やはり何のコメントもない。ちなみに、第9章の終段でリニェロルとフェンシング教師が友人関係であることが分かる。フェンシング教師もやはり悪人である。フェンシング教師は自分の妻を刺殺した男である、また提督の殺害者でもある。ただし、リニェロルはシャダウにとって「悪い」悪人であるが、教師はシャダウにとっては「良い」悪人である。脱出の最後の場面で救い主となる。また、「護符」のお陰で命が救われたとはいえ、やはり、ある程度まで彼によってフェンシングの稽古を積んでいたがゆえにギーシュ伯爵を倒すこともできたのである。だが、同様に、「語る私」の立場からは一言もない。

頻繁に、語る私が介入すると、場合によってはかえってわざとらしさが出てくるかもしれない。弁解しない方がかえって成熟の証ではないのだろうか。逆に、もし本当にシャダウに精神的発展がないなら、はたしてシャダウは「語る私」の立場から何の注釈や弁解もしなかったであろうか。若い頃と同じように偏狭で、「狂信的な」58歳のシャダウなら、「いきり立って」、相変わらず予定説の信奉者として自説に固執し、それを主張し、自己の行動の正当性を論じ、また弁護したのではないだろうか。

若いシャダウを58歳のシャダウは余分な注釈や反省の弁無くして、直接読者に提示しようとしている。無言の「語る私」、提示する私の意図は何か。一貫して弁解しようとせず、すべてを読者の判断に委ねている。まさしく、「作中人物に下さるべき読者の独立的批判を阻害しないために、努めて自らの所見は隠蔽しようとする。」のである。しかもその作中人物は枠内物語のかつての若い自分自身である。この語り姿勢こそシャダウの成長ではないか。偏狭で頑固な体験する私＝若者シャダウと、同じように偏狭で頑固な人々や、それと対照的な、寛容な人々を、的確に提示描写して、無言で読者に示しているところにこそ、語り手の意志、シャダウの成長と反省の姿勢があるのである。高い精神性の人々の優れた言葉や行為、また逆に狂信的な人々の常軌を逸したような言動をも、どちらも的確に提示している。語るべきものを取捨選択するのは語り手であり、この枠内物語を語っているのはC.F.マイアーを装った三人称の語り手ではなく、58歳のシャダウである。選択の仕方や提示の仕方に「語る私」の本当の精神があるのであり、それは成熟を示していると思われる。前面に出て弁解や後悔の言葉を多々まき散らすだけが反省ではない。読者に対して自己の若い頃の言動を直接さらけ出すのも、ひとつの立派な反省の姿勢であろう。「たぶん今日

でも、同じ局面にぶつかれば、[…]] (511) (wohl heute im gleichen Falle (8))の背後には深い苦悩が存する。

おわりに

『護符』はクナップも述べているように、予示が非常に多い作品である。その中でも重要な、第二外枠でなされ枠内物語の筋の展開の基本線を示す根幹的予示、枠内物語の中でなされ、主人公シャダウの行動の指針となる二つの主導的予示、そして歴史上の出来事を扱ったり、背景にしたりしている物語に必然的に存在する史実の予示、この作品の場合には聖バルテルミーの日の予示、の四大予示について考察し、これを柱として作品が堅固に構成されているのを見た。

さらに、「語る私」の声の欠如のゆえによく指摘される、58歳の語り手シャダウの精神的発展のなさに対しては、エヴァンスが「圧縮された教養物語である。その内的法則性は世間知らずな青年の主人公を調和のとれた人間へ成長させる」¹⁾と述べているように、われわれにはシャダウは年齢相応に精神的に成熟しており、それは枠内物語の語り方、冷静で客観的な語り素材の選択、配列、また人物の的確な性格及び行動描写にこそ現れていると思われる。「語る私」の沈黙の雄弁を聞き取るべきである。

1) T. S. EVANS: a. a. O., S.19.